

池上彰の インタビュー

vol.52



傷の痛みをわかち合う経験で 生き延びた意味に気づいた

1985年、イラン・イラク戦争（1980～88年）のさなかに生まれ、4歳のころに孤児となったサヘル・ローズさん。8歳で養母とともに来日してからも、住む家をなくし、いじめにあうなど壮絶な経験をされています。さまざまな状況に置かれる子どもたちのため、学校や先生に対する切なる願いをお話しくださいました。

このインタビューは、2024年7月に収録しました。

世界情勢と自分の人生は切り離せない

池上 ここ近年、世界情勢は目まぐるしく変化しています。一方で、日本の若者たちは世界に対する関心が薄れてしまっているように見えます。サヘルさんはどのようにご覧になっていますか。

サヘル・ローズさん（以下サヘル） 2022年のロシアによるウクライナへの軍事侵攻以降、世界は激しく変化しています。日本では日常の時間が流れていても、現地で暮らす人たちには私たちとは違う時間が流れている。そして、この対談記事が読者の皆さんに届くころ、どんな世界が広がっているかは誰にもわかりません（収録は2024年7月）。自分の教訓として先ことはあまり考えないようにしていますが、世界情勢は、自分たちの人生と切り離すことができないと考える毎日です。

池上さんは、大学などで若い世代にどのように世界情勢を伝えていらっしゃるのですか。

池上 いつも学生には、「まるで関係のない遠いところの話のように思えることも、すべてはまわりまわって私たちの生活に影響している」と話をしていきます。例えば、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、遠いところの話かもしれませんが、しかし、ロシアに対して経済制裁が行われ、石油と天然ガス、小麦の価格が世界的に跳ね上がりました。実は、日本の小麦の輸入先はロシアやウクライナではなく、アメリカ、カナダ、オーストラリアなのですが、他国で小麦の需給が逼迫すると、全世界的に値段も上がります。また同時に、地球温暖化の影響で近年アメリカやカナダで干ばつが続き、小麦の出来が悪くなっている。国際情勢や地球温暖化の影響で小麦



撮影 松本のりこ

俳優

Sahel Rosa

サヘル・ローズ

1985年、イラン生まれ。7歳までイランの孤児院で生活し、8歳で養母とともに来日。高校時代にラジオ局のオーディションに合格、芸能活動を始める。ナレーターやコメンテーターのほか、俳優としても活動の幅を広げ、主演映画『冷たい床』（2018年）でミラノ国際映画祭にて最優秀主演女優賞を受賞。2014年には国際人権NGOの活動「すべての子どもに家庭を！」で親善大使も務めた。公私にわたる支援活動が評価され、2020年にアメリカで人権活動家賞を受賞。著書に『これから大人になるアナタに伝えたい10のこと』（童心社）などがある。



ジャーナリスト
いげがみ あきら
池上 彰 (聞き手)

1950年、長野県生まれ。ジャーナリスト。名城大学教授。慶應義塾大学卒業後、73年、NHK入局。報道記者として勤務。94年から11年間、「週刊こどもニュース」で子どもたちにわかりやすくニュースを解説。2005年、NHKを退局。『池上彰の君と考える戦争のない未来』（理論社）、『池上彰の社会科教室』（帝国書院）など著書多数。本誌の対談を集録した『池上彰が聞いてみた「育てる人」からもらった6つのヒント』（帝国書院）も好評発売中。最近、アメリカ合衆国大統領選挙を現地取材。

の値段が上がるとパンやお菓子の値段も上がるんだよ、と。

サヘル そうやっていてねいに身近なパンやお菓子につなげていただけると、わかりやすいですよ。

学校が子どもの最後の砦になることも

池上 サヘルさんは8歳で日本に来たのですよね。

サヘル 私はイランの小さな町で生まれ、イラン・イラク戦争停戦直後の空爆で4歳のとき孤児になり、7歳まで孤児院で育ちました。そして義母と養子縁組をして8歳のときに日本に来たのですが、日本語も全くわからない状態でした。大変なこととてもたくさんありましたが、あの当時、子どもにとっての学校は、今よりも自由で恵まれた状況だったのか

もしれないと思うことがあります。

例えば、自分の人生について講演するために学校に呼ばれることが多いのですが、外国にルーツのある子どもたちが昔よりもずいぶん増えているのに、どんな国籍の子がいるのかを先生にたずねても、はっきりとはわかりません。さまざまな配慮から一律に国籍を把握するようなことはしていないそうです。

池上 それは残念ですね。その子にどんな国なのか話してもらったり、みんなでその国について勉強したりすると世界はもっと身近になりますよね。

サヘル そうなのです。それに、日本人であっても外国籍であっても、私自身が子どものころにそうであったように、経済的に厳しい家庭の子、家族から暴力を受けている子、居場所のない子にとって、学

校は身を守るためのシェルターでもあり、給食が唯一の栄養源になることもあります。学校の先生が、家庭では解決できない事情を抱える子どもたちの最後の砦になることもあります。SOSを出せる相手になれたはずが、今はモンスターパーレンツという言葉が世の中に根付いてしまい、いろいろなことを気にしすぎて、大切なことがどんどん共有されなくなっています。きっと教育者の方もこの世界のさまざまな制約に苦しんでいるのではないのでしょうか。社会は今、分断が進んでいます。世界が目指すSDGsからも逆行しているように見えます。

池上 サヘルさんが日本に来たころは、学校はどのような状況だったのですか。

サヘル 小学校の先生方は、私にたくさんの手を差し伸べてくれました。国に帰るか日本に居続けるかわからないのに、今必要なことは誰かが親身向き合うことだと、校長先生が日本語をいねいに教えてくださいましたし、給食のおばちゃんも、お母さんと私を救ってくれました。住む場所がなくなり路上生活をせざるを得なかった時期に、仕事と住む家を探して助けてくださったんです。

池上 中学生のころは、クラスメートにいじめられていたときも先生が助けてくれなかったと著書にありました。それは本当につらかったですよね。

サヘル とてもつらかったです。たまたま入った中学校は、小学校とは全く違いました。学校からのお便りのプリントは今のように配慮されておらず、日本語が全く読めなかったお母さんのために、私が必死に読んで伝えていました。いじめられていることもお母さんに言えなくなりました。先生たちもいじめられていることについて、「あれは冗談だから」



犯罪に手を染めてしまった外国人の 歴史的背景を見る必要があります

「気にしすぎ」「がんばれ」と言うだけでした。

でも、人それぞれ、「心の皮膚」の敏感さが違うと思うのです。たぶん私は、心そのものが敏感肌だった。「普通なら大丈夫」と先生が思っても、生徒が40人いれば、40通りの「普通」が存在します。親の悪口を言われたり、外国籍であることを馬鹿にされたりしたらうれしくない。子どもたちを守るには、近くにいる大人です。でも、中学校では、その大人が関わろうとしてくれませんでした。

教科書にない教員の経験や思いも伝えてほしい

池上 バブルの時代には、大勢のイランの人たちが日本に来て建設現場などで働いていました。しかし休みの日に代々木公園や上野公園に大勢のイランの人が集まっていると、祖国の情報交換をしているだけなのに、なんとなく怖さを感じていた日本人が少なくなかったと思います。

サヘル 最近も、窃盗などで外国から来た人たちが関わっていたことがニュースになると、「移民を入れると犯罪が増える」と言われますね。出稼ぎで来

ている人たちの働く場所がなくなり、騙されて――

本人の問題もあり、正当化はしませんが――彼らが犯罪に手を染めてしまったその背景を見る必要があると思います。すべてのできごとは、歴史的背景と関連しています。紛争や戦争、イランなら革命やイラン・イラク戦争、そして、アメリカがその背景でどういう動きをしていたか。経済制裁で国家にダメージを与えているつもりが国民を苦しめている。苦しめられた国民が犯罪者になっていくということも起こります。いろいろなできごとが全部つながっていると理解する必要があると思います。

池上 さらに言うと、当時、日本とイランが観光ビザ免除協定を結んでいたのです。イラン・イラク戦争が終わり戦場から戻ってきて、仕事がない大勢の人たちが日本に来て日本経済を支えました。圧倒的多数は本当によい人だった。どこの国だって圧倒的多数はよい人で、罪を犯す人はごく少数です。

私は、これまで2回イランに行きましたが、日本から来たというだけで、ワーツと周りに集まってきた笑顔で質問攻めにありました。「『おしん』を知っているか」から始まって（笑）、「カワサキ」「ヨコハマ」、そしてなぜか「イサワ（石和）」という山梨県の地名が出てくる。きつと石和温泉で働いていたのでしょう。つまりあのときに日本に出稼ぎに来て、イランに戻って、そのお金を元手に成功した人たちがたくさんいる。ものすごく親日ですよ。

サヘル 日本とイランの友好関係は1929年以来続いています（42〜53年は外交関係断絶）。でも、今お話しくださったようなことは学校の教科書には載っていません。歴史の教科書にはメソポタミア文明やゾロアスター教などの言葉が少し出てくる程度で、あとはイラン・イスラーム革命、イラン・イラク戦争と1ページにも満たない内容です。現在のイランの情勢なども全く知ることはできません。

池上 それこそ私がおもし学校の先生で、生徒が「イランから来ました」と言ったら、「ちよつと地図を広げてみよう！」と始めたいですね。「イランとイラクを間違える人がいるけど、イラクはアラブ人で、イランはほら、ペルシャだよ」という話もしたい。大学でも、「イランでは、ペルシャ語は実はアラビア文字で書かれている」と話す学生は意外な顔をします。そこで、「日本語の漢字は中国の文字を



来日後、10歳のころ。ランドセルを手に。



使っている。よその国でつくられた文字を使うこと
はあるんだよ」と伝えると納得してくれます。

サヘル 素敵ですね。池上さんのお話からは、池上さんご自身の好奇心が伝わってきます。学校では教科書での一定の学びも必要ですが、私がいつも先生たちに期待し、お願いしているのは、「子どもたちが世の中に出て目の前に当事者が現れたとき、どうその当事者をとらえられるか」を学ぶ機会を提供してほしいということです。自分の興味がないことは自分の選択で遮断できる時代になりました。SNSでは友だちだって消去することができます。でも唯一、学校で学ぶ時間だけは、大人たちから何かを伝えることができる貴重な機会です。社会で起きている現実や教科書ではわからないこと、先生たちの身の回りで起きていることを熱を持って伝えられる場です。

ただ教科書に載っていることを伝えるだけなら、ロボットでもAIでもできます。先生も失敗して、傷ついて、いじめられたことがあるかもしれない。今の仕事で大変なこともあるはず。先生だから立派である必要はないと思います。人生の先生とし

て失敗もたくさん聞かせてもらえることが、子どもたちにとつての教訓になるのだと思います。

自分を好きになると世界にも目を向けられる

サヘル 実は私、中学生のころにテレビで見た池上さんが忘れられないんです。池上さんのお話は面白いなと思っていました。

池上 ワハハハ（笑）。

サヘル 当時、いじめられていた時期でもあり、いろんなことがわからなくなっていたけど、池上さんのテレビを見たり本を読んだりすると、すごく好奇心を持って話をしていくとわかる。どこかに載っている言葉をそのまま読み上げているんじゃないかと、ご自身のなかから出てくる言葉を伝えてくださってるんだなって。

池上 先生自身も自信や経験がないと、教科書や指導書を棒読みするようなこともあるかもしれませんがね。実体験や熱い思いがないと、やっぱり聞く人には響かないんだろうと思います。

サヘル 高校生のとき、モッチとあだ名で呼んでいた私の先生も、まさに池上さんのような先生でした。いつも自分の実体験をもとに語ってくれて、定時制高校だったのに大学に行けるようにヘルプをしてくれました。私は、入学当初は成績が悪かったけれど、そうして誰かひとりでも信じてくれる先生がいて、「あなたにできること、武器を1個でもつくろう」

と言って信じてくれたことが大きな励みになり、勉強もがんばることができました。自分ではできる可能性があるんだと思えるようになった。

子どもは自分に自信を持てば、自分のことを好きになることができます。そのゆとりが生まれた瞬間に、社会に対して世界に対しても目を向けられるようになると思うんです。自分を否定されてしまっ

て自分に自信がない子は、社会に目を向けることは難しい。そういうこともできる場所が学校であり、先生なんだと思います。

池上 先生たちも今、非常に忙しく、大変な状況だと言われていますね。

サヘル 私がとても胸が詰まるのは、希望を持って先生になった若い人たちが、先輩の先生たちが疲れ切っているのを見ることです。先生たちの人手が足りていないなかで必死に働いている。先生たちが「どうして先生になったんだろう。守りたい子どもを守れない」と疲弊してしまうのは本当につらい。だからこそ私は今、先生たちもがんばりすぎないでほしいと思います。なぜ先生になりたかったのかを忘れないでほしい。

この対談を読む方は、ベテランの先生が多いと聞いています。そうしたベテランの先生方は若い先生たちがどうすれば自信を持って、生き生きとのびのびと子どもたちと関われるのか、何が問題なのかを考え、改善してほしい。現場にいる苦しみを知って

信じてくれる先生がいたから

勉強もがんばることができました

私が自分を探し続けることは

今ここにいる自分を否定すること

いるからこそ守れることがある。守ってくれる先輩方の大きな背中を見れば、新人の先生がその背中に応えてくれるはずです。そんなよい連鎖が生まれることを願っています。

児童養護施設の子どもたちを忘れないで

サヘル 私から先生方へお伝えしたいこととして、もう一つ大事なことがあります。学校には児童養護施設から通っている子もいることを忘れないでほしいのです。施設から通っている子どもたちは、高学年になるにつれ、自分が思っていた当たり前が当たり前ではないことに気づきはじめます。友だちの家に行くといろいろなことがわかってしまう。保護者が来る行事で複雑な思いを抱えている子もいます。

今の日本では、児童養護施設にいる子どもたちの7割以上が実親などから虐待された経験があるといわれています。数字の変動はありますが、この数年でも、要保護児童数は4万人を切っていません。

池上 私もグループホームを見に行ったことがありますが、そこでは10人ぐらいの子どもたちが数人の職員の方と暮らしていました。

サヘル 児童養護施設でもグループホームでも、感情表現がうまくできない子は置き去りになってしまふことがあります。子どもたちのなかには、親に恵まれない子や、愛を知らずに貧困にさらされ、飢えて心が枯れてしまう子もいる。そんなとき、学校で

自分を待っていてくれる先生の存在はとても大きい。先生がその子にとつてすごく大事な居場所になることもあるとお伝えしたいのです。

池上 児童養護施設は、18歳になると出なければならぬことが多く、高卒で就職するとなると、児童養護施設にいたというだけで就職がとて難しくなると聞いたことがあります。ところが、大学に進学して「大学生でひとり暮らしでした」と言うと、過去が全部消えて就職の差別というのがかなりなくなるんですよ。児童養護施設の子どもたちも大学に行きたい子は進学できるように支援する必要があります。児童養護施設にいるのに大学に行くのはせいたくだと考える人もいるかもしれませんが、全くそんなことはありません。

サヘル 本当にその通りです。仕事に就けるかどうかで、人生が大きく変わることもあります。就職できても、叱られると自分を否定されたと思ってしまう。辞めてしまう子もいますが、そこに至るまでの背景を見てほしい。私も7歳まで施設で暮らしていましたが、安易に「どうせ施設の出身は」と言われることがよくありました。私自身も、誰も私のことなんて見てくれないという経験をしてきましたが、彼らにはそのような失われた時間がある。どんな生い立ちであれ、みんな生きる権利を持っています。

また、そういう現実を知らない子どもたちには、社会でどんなことが起きているかを伝えてあげてほ

しい。そういう現実があることを知っていれば、友だちから「実は施設に入っているんだ」と告白されたときにも、「そうなんだね」と否定せずに受け止められるはずです。知らなければ、中学生の私がされたように、「何それ？ ありえない」と否定されることもある。知ることですいぶん変わるはずですよ。

自分の痛みを誰かに伝えることは意義がある

池上 サヘルさんは今こうして自分の過去を振り返りながら問題点を提起してくださっています。そのような話ができるようになったのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

サヘル たぶん大きなきっかけがあったというよりも、徐々にだと思えます。自分のことは語れず、自分探しをしていた時期もありましたが、途中からそれは意味がないと思うようになりました。

池上 どうしてそのように思ったのですか。

サヘル 自分はここにいるのに、私がずっと自分を押し続けたら、ずっと今ここにいる自分を否定していることになる。自分はもうここにいるのだから、その自分を肯定して、自分の経験を埋めていく作業をしようと思っただけです。傷つかないほうがいいけれど、自分の傷は癒えることはありません。ついでにしまった傷の痛みほど、人とわかち合えるんだということにも気がつきました。

池上 傷の痛みをわかち合う経験をされたのですね。

サヘル はい。いろいろな国に行かせてもらいましたが、イラクに行ったときにそのことを強く感じました。イラン・イラク戦争停戦直後に私はイランで孤児になったのですが、イラクに行ってみると、国や人種は関係なく、私も彼らも、お互いに戦争の被



2024年2月、特定非営利活動法人 難民を助ける会 (AAR Japan) の活動に参加し、ウガンダの難民居住地でコンゴの内乱を逃れた子どもたちと交流した。

害者だったのです。実際に会って話をすることで、戦争で負った心の傷は同じだということがわかり、その傷の痛みをわかち合うことができました。同じ痛みを抱えている人が世の中にこんなにたくさんいるんだと知りました。アメリカにも傷ついている人は

大勢いて、どんなに富があっても満たされていない人がいる。だからこそ、自分の痛みを誰かに伝える意義がある。痛みを乗り越えた私にできるのは、これを伝えることしかありません。

私は人を守ることはできない。痛みを取り去ることはできない。でも、ひとりじゃないんだよと伝えることはできる。私は自分の人生を語ることで、自身のメンタルケアをしてきたんだと思います。

そして、お芝居を通して自己表現をすることも、どんどん自分の経験を言葉にすることができるようになりました。自分の心のなかにあるものを芝居で表現する、文章にする、写真に収める。そうしていくうちに、自分が存在しているんだ、自分は何かを伝えるために生き延びたんだということに少しずつ気づけた。それが20代後半だったと思います。

子どもたちに「平和」の授業を

池上 最後になりますが、『階』を読んでいる皆さま

学校は可能性がたくさんある場所 子どもたちは未来を担っている

んに伝えたいことはありますか。

サヘル 学校の教育に「平和」の授業をつくってほしいという強い思いがあります。戦争を終わらせ、世界に平和が訪れることはとても難しい。でも週に1時間だけでも、必ずその時間は世の中で起きていることにみんなで目を向けて、「平和ってなんだろう」と考える時間を持つてほしいんです。それは日本のことでもいいし、自分たちの身近なことでもいいと思います。そうやって、平和の種まきができる授業があればと思います。

池上 広島と長崎では平和の授業をしていますね。

例えば、広島市の学校の多くは8月6日が全校登校日で、夏休みですが、学校で原爆のことを学びます。広島市の学校を卒業した子が東京に引っ越して来ると、「登校日もなく、8月6日が何の日か知らない人たちがいっぱいいてショックを受けた」と言います。国語や社会科、総合的な学習の時間に平和学習の時間を設けたり、戦争体験者の話を聞いたりすることなどもあります。十分ではないかもしれませんが、**サヘル** そういう違和感を持った広島の子どもたちが大人になったとき、「意識高い系」などと言われるて傷ついてしまうこともあります。ほんの少し意識をするだけで、生き方は本当に変わるはず。これからの未来は、特に「平和」について学校のなかで意識して伝えていく必要があると思うのです。

平和についてだけでなく、家庭でも学校でも、選

挙や政治の話はしないことが多いのではないでしょう。その結果、若い世代の投票率が上がらず、日本の衰退にもつながっていく。生きる権利、人権、選挙権について、しっかりと学校で子どもたちに伝えてほしいと思います。

未来を担う子どもたちにどう教育をするかによって日本や世界が変わると思います。学校は、本当に可能性がたくさんある場所ですね。

対談編集／太田美由紀



対談 を振り返って

サヘル・ローズは本名ではありません。空爆で孤児になってしまった結果、本当の名前を知っている人がみんな亡くなってしまうからです。でも、彼女を見出し、日本まで連れてきてくれたイランの女性が義母となって、彼女を育ててくれました。サヘルさんの自叙伝を読むと、その壮絶さに言葉を失います。にもかかわらず言うべきだからこそ言うべきか。いまのサヘルさんの言葉には説得力があります。頑張る生きようと思わせてくれます。素敵な笑顔が私たちを奮い立たせてくれるのです。